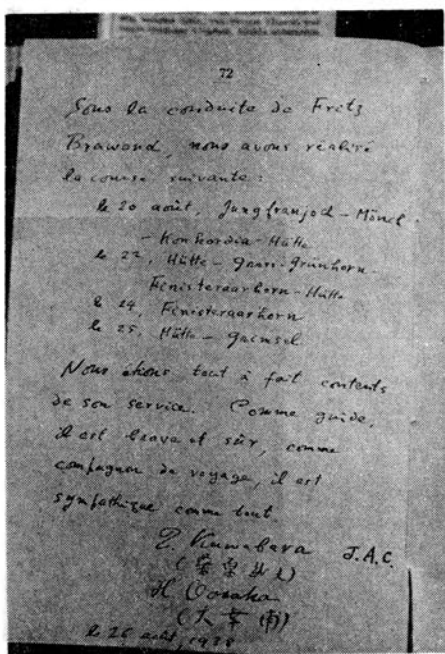




半世紀の思い出

桑原武夫

同じ三高山岳部出身、同じJ.A.C.、A.A.C.K.の会員といっても、今西錦司のように千五百山の登頂を了えた後も、なお悠々と三角点

追跡をつづけているのとは違って、チョゴリザ遠征後まったく山から離れている私には、『山』に執筆することなど思いもよらな



1986年(昭和61年)

2月号(No. 488)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

半世紀の思い出

桑原武夫……………(1)

科学研究委員会講演会

チベット・チャンタン高原の自然

講師 五百沢智也氏……………(2)

海外の山……………(2)

「マナスル山頂にあったピース鐘」

「ブータン・ヒマラヤを旅して」

「ニュンチンタングラ峰の概況」

東西南北……………(5)

「国師岳から金峰山へ」「丹水会例会」

「玄さんご回復おめでとう」「ゲッチ

ンゲンのオデルさん」「晩秋のアル

タイ行と中国登山界余聞」「ピンダ

リ氷河への道」「徳高画想」

図書紹介……………(6)

「ネパールの歴史」「山旅の足音」

「海外登山の報告書から」「遭難・

追悼集から」

報告 熊本支部、北海道支部……………(9)

会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(9)

図書受入報告 図書委員会……………(10)

お知らせ「山岳史懇談会」「岐阜支

部 15 周年記念登山」……………(4) (11)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時

水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日

13時～20時

敢て確実、山旅の仲間としてとて

二五日 ヒュッテ・グリンメル
私たちは彼のサーヴィスに全く
満足した。ガイドとして、彼は勇

た。

ところが会報編集の岡沢祐吉氏
から手紙を頂いた。同氏が昨秋グ
リンデルワルトを訪れたたさ
い、同地のフリッツ・ブラヴァン
ト氏に会われ、フリッツの案内人
手帳に私がフランス語で記入した
登山証言を見付けたとして、その
コピーが同封されてあった。

「フリッツ・ブラヴァントの案
内で、私たちは次のコースを踏破
した。

八月二〇日 ユングフラウヨッ
ホーム・ヒューン・コンコルディア
・ヒュッテ

二二日 ヒュッテ・グロス・グ
リユン・ホーナー・フィンステラ
ール・ホーナー・ヒュッテ

二四日 フィンステラール・ホー
ン

二五日 ヒュッテ・グリンメル
私たちは彼のサーヴィスに全く
満足した。ガイドとして、彼は勇

に、気さくなフリッツ氏は自分でも見られるよう

は、ザミ・ブラヴァント氏の親戚とい
うこともあって、所持者探しの苦労は
なかった。

スイスなら何処でも見られるよう

も好感がもてた。

一九三八年八月二六日
J.A.C. 桑原武夫・大幸甫

このコースは平凡なものであ
り、また前に『歐洲山岳雑話』に
したので、ここには繰返さな
いが、半世紀前の筆蹟の中から青
春の山行の楽しさが湧き出るかの
ように、私は甘美なひとときをも
った。岡沢氏の好意に深く感謝す
る。フリッツはどんな案内人にな
っているのだろうか。

「編集者注」 昨春秋、私はスイス・グ
リンデルワルトにサムエル・ブラヴァ
ント氏を訪ね、七年前に撮りそこねた
同氏所有の山案内人手帳の日本人の記
録を、残らずコピーしてくる予定だっ
た。そして、出来れば他の案内人手帳
も、とグリンデルワルトの近くに住む
私の友人を介して頼んでおいた。失明
に近いサムエル・ブラヴァント氏には
手紙のような書いたものより、電話の
ように耳から伝えるもののほうが(補
聴器の助けは要ったが)親切ではない
かと思っただけだ。そしてそれは最も
確実な方法でもあった。

お知らせ電話 234六六五九

手帳を持ってザミ氏のところへやって来た。

往年の山案内たちが次々と世を去っていくなかで、このフリッツ氏は今なお現役でもあるかのよう、元氣瀧らつといた。

桑原氏にお送りしたフリッツ氏のものとは別に、クリスチャン・シュルネッカー氏の案内手帳にも桑原氏たちの英文の記述があったので、ここにその写真掲載します。内容は、山行記録は同じだが、所感文はフランス語のものより幾分か短いよう。

「私たちは次の登山を楽しんだ。――(中略)――C・シュルネッカーの親切な案内に私たちは心から感謝している。今回もまた、大幸甫氏のように初めて接するようなお名前のかたが何人か――」

科学研究委員会講演会

チベット・チャンタン高原の自然

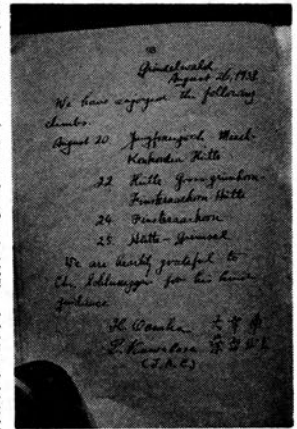
一九八五年六月二十八日(金)
午後六時半より・本会ルームにて

講師 五百沢智也氏

委員の徳久球雄氏より五百沢智也氏の紹介の後、地形や鳥類などの美しい多数のスライドによるチャンタン高原紀行の講演を伺った。

以下五百沢氏に執筆して頂いた講演の概要を掲載しよう。

チベット、チベット高原の自然



シュルネッカーの案内人手帳

おられた。松本馨(二高・東大卒)、大野精七(当時北大教授)、和田野基(当時大日本セルロイド技師・工博)といった方々だ。もし会員のなかにこれらの方の消息を知っておいでのかたがあったら、お知らせいただきたい。この場を借りてお願いします。なお今回収集してきたものは折をみて会報などに発表していく予定です。(岡沢)

海外の山

マナスル山頂にあったピース鐘

冬のマナスル(八八三四)に二人だけで登った山田昇、斉藤安平の快挙については一月号でふれたが、山田が山頂で見つけ、持ち帰ったピース鐘が、三十年前の日本人による唯一の八千峰初登頂を思い出させた。

ピース鐘は、岩と雪の間にはさまっていた。あとであけてみると、重しの小石と、マッチ箱がはいっており、マッチの中箱に一九五六年五月九日、この山に初登頂した横有恒以下日本隊の十二人の名が書かれていた。

当時第一次隊のメンバーは、四十一歳の今西寿雄(現日本山岳会会長)と、シエルバのギャルツェン・ノルブで、今西は鹿島槍で遭難した学習院大パーティーの一人の写真を頂上まで託されたが、ピース鐘は残していない。

二日後の十一日に二次隊として日下田実と共に登頂した加藤喜一郎が、仲間たちの記念に、と日本山岳会のマッチ入りのピース鐘を置いてきたのである。

三十年前の、おまけに八千峰の高所のことでは、加藤は、どのようにピース鐘を置いてきたか、はつきりとは覚えていないという。はじめから予定したわけではなく、その場になって手近にあるマッチに会員の名を書き、皆の気持を代弁しようとしたのだらう。

思えば、マナスルは日本人と縁の深い山である。十五年後の一九七一年、この山の第二登を、バリエーション・ルートからなしたげたのも高橋照を隊長とする日本のマナスル西壁隊(実際は北西稜を登攀した)だった。七四年、黒石恒隊長以下同人ユングフラウを中心とする

日本女性隊が、女性による八千峰初登頂の記録をうち立てたのもマナスルである。初登頂から約三十年を経て、冬期アルパイン・スタイルの二人が、山頂で古いピース鐘を見つけたというのはいかににも因縁めいている。

せっかく山頂に残したものを、なぜ勝手に持ち帰ったのか。そういう批判もあるようだが、すでに七十人以上が登った山である。思いが強いからと言って、皆が山頂に記念品を残し、永久保存しようとしたら、別な問題が生じるだろう。歴史の生きた部分を次代に伝える意味からも、非難される筋合いはないと思う。

ところで、ピース鐘は現在は一五五円だが、一九五六年当時はいくらだったか。実はその年の三月一日に、最近では考えられないことだが「値下げ」されて二百二十五円の鐘が二百円になっている。マナスル隊が日本を出発したのは二月二日(本隊)と十一日だから、旧料金の時だった。多分寄贈を受けたものと思うが、これから「時代」を嘆きとることもできる。

百円ライターですら時代遅れのいま、三十年前のマッチの役割りを振りかえるのも興味深い。「JAC」のネーム入りのマッチを、今西はいまも大事に保管しているという。

三十年前のマナスル。その当時の経過については、幸い、三月の山岳史懇談会(編注)3月13日18時30分、ルームで開催(編注)3月13日18時30分、ルームで開催)で取り上げるそうだが、一次、二次隊の苦労を含め、より広い視野に立った、「マナスル三十年をきっかけに、ヒマラヤの過去と現在を語る集い」といったものになってもよいと思う。

考えてみれば一九五六年には生れていなかったクライマーが増えていくのだから。

(江本嘉伸)

クラコット) 探訪を組合わせた旅であり、自動車五台で約六千*、荒塘高原南縁を東西に往復した。出発点のラサで三六三〇*、最高高度六〇〇〇*、四〇〇〇*以上での滞在が四〇日という高所の旅であったが、日頃高い所に縁のなかった演者の娘(北京大学歴史系在学中)を含めて中・日計十七名の全隊員が旅を無事に終えることができた。

コースは、ラサからヤルツァンポー川を渡って峠を越えて羊卓雍錯湖畔に出、再び金坑峰近くの峠をこえて江孜の白居寺に出る、さらに平地をばして日喀則まで三八〇*の強行軍が始まった。宿泊所を有する集落が少ないため、一日中休まず走り続ける必要があった、写真撮影も車窓よりのものが多くなった。車を止めると連絡官の気嫌が悪くなるからだ。

日喀則で三泊、夜明けから午前にかけて毎日雨が降った。午後の雨あがりにタシュルンポー寺や銀細工の工場、農園などを見学した。恵海の滞在やネパール・チベット戦争でこの街は歴史的に大事などころだ。日喀則から先はチョモランマやシヤパンマへ行くのと同じ道を拉改まで行く。街の手前の兵站到り、近くの温泉にいった。

拉改からフェリーでヤルツァンポー川を渡り、西へ走る。標高四六〇〇*の山あいの兵站定久で泊

る。この道路沿いには第一道班から定久兵站までに、十五道班の道路維持の工事事務所があった。翌日はその道を第二十二道班を過ぎたところで、北に右折する。直進すればヤルツァンポー源流を溯行して、マナサローワル湖へ達することができのだが、雨期の増水で不通箇所があつて使えなかつた。ここからの道は広大な蔵北地区の高原を北へ抜けて西藏高原の中部を東西に走る地溝帯のようなところに出、さらに西に向つて獅泉河に出る。

山地はすべて裸の岩山だが、風化した岩礫が埋めつくし、なだらかで、風化に強い。節理の少ない岩石や硬い岩石のところだけが、高い峰や岩壁を残している。その岩の生の岩の色あいは基盤岩石分布の絵地図のようだが、まばらで小さい緑色の草が風景全体にエアブラッシュをかけたような色あいをつくっている。

北へ向つて登りにかかるの間欠泉の湯煙が見えた。さらに登つて黒頸鶴(和名オグロヅル)やインド雁のいる打加錯を過ぎ、五〇〇〇*の峠を越え、新鮮なクレータを横断、流れに沿つて北へ下り、土壩にかこまれた措勤の街へついた。赤や緑の大胆な色とデザインのインディオみたいな服のチベット人がものめずらしそうに集つてくる。今回の旅行で最も異郷であることを感じた場所である。

海外の山

ブータン・ヒマラヤを旅して

吉 永 英 明
(千葉大学山岳部)

昨年九月から十一月の二カ月間、ブータン・ヒマラヤを旅する機会を得たので感じたままを述べてみたい。

ブータン・ヒマラヤは、一九八三年にオープンされたが、現在、名のある山では国境線にあるガングルブンズム、ジチュダケ、マサ・カンと国境線の内側にあるナムシラ、カンプーの五峰が解禁されている。いずれも中央ブータンから西ブータンに位置する山で、東ブータンは未解禁である。私達の千葉大隊も当初は東ブータンの山を申請したが、未踏査の地域であるとして許可にはならなかった経緯がある。ブータン政府は今後二年に一峰の割でオープンしてゆく方針とのことである。

私達が今回の遠征で初登頂したナムシラは、地図では標高六五〇〇*と記されているが、登頂時の高度計では東峰が五八一五*、西峰が六〇〇〇*以上なかった。同時期に京大隊が初登頂したマサ・カンも地図上の標高七二〇〇*より五〇〇*以上低かった由(ブータン観光公社担当官談、また、一昨年、川崎橋山学会が初登頂したカンプーも六五〇〇*が五五九〇*であった。こうした現実をみると、既存の地図に記されている七、〇〇〇*、七二〇〇*といった切りのいい標高は推定高度の域を出ず、現在十六峰あるとされている七〇〇〇*以上の山も怪しくなってくるが、六〇〇〇*クラスの山は無数にある。今回は五〇〇〇*

六〇〇〇*クラスの未登峰五峰と既登峰一峰に登り、地図上空白となっている周辺部の踏査も行なうことができた。いずれにしても、シエルバもおらず、自分達で山を見つけ、そして登ることができるのは確かである。

いっぽう、登山を解禁して間もないことからブータン当局の不慣れも目についた。最大のものは輸送と食料である。ほんらい、登山隊はベースキャンプより上部用の食料、装備を準備、携行するのみで、アプローチとベースキャンプは輸送を含めブータン当局が用意することとなっている。キャラバン中の輸送では低所では馬、高所ではヤクとポーターを利用したが、馬からヤクへの交代、ベースキャンプ撤収時などスムーズに行かず、数日間待機させられたことが度々であった。連絡手段が整備されていないため行政組織を通じての命令が十分行き届かず、ブータンの社会経済構造からポーターのなり手が少ないためと思われた。特に今回のルナナ地方では、中央の威令が行きわたっておらず、非協力的であった。また、食料もネパールのシエルバと同じで、準備、使用に計画性がなく、中途での不足が目立った。集落が極端に少ないため調達もままならず苦勞した。日程、準備に余裕のある登山隊の場合には何とか調整ができるが、トレッキングの場合などでは大問題となる。

ブータン・ヒマラヤの魅力は、何といつても「未知」につきる。ヒマラヤの先達たちの苦勞に触れつつ、手作りの山登りが楽しめる山が無数にあるのがうれしい。

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

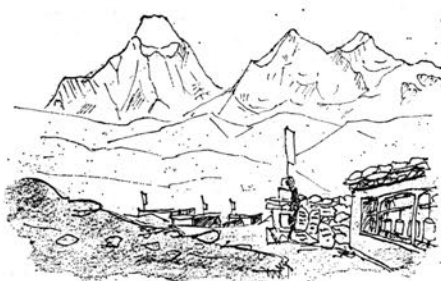
海外の山

翌日は湖畔から谷を抜け、左手に氷河が山麓まで押し出している。夏、康堅の山地を見ながら、峠を抜け、低地帯へ一気に下る。この低地が羌塘高原の南縁になっている地溝帯だ。さらに西へ大碓原を走って改則で泊る。

改則の西、塩湖から左折して南へ向う。二つの山を越えて、インダス川流域に入り、下流の獅泉河に向う。二つの山の間の湖、轟爾錯に天幕を張り、NHK班が遊牧民の移牧の取材をする。

こちらは地形観察とバード・ウォッチングに精を出す。アカツクシガモ、チャガシラカモメ、サケイ、アカハシガラス、ハシボソガラス、オオバン、ヒクイナ、オオメダイチドリ、アカアシシギ、ノウサギ、ヒマラヤンマーモットなどをプロミナーでのぞき、山から順に扇状地、湧泉帯、アース・ハンモック(谷地坊主)帯、泥地、白泥堆土の三層ばかりのブロック帯とその山側池塘、そして干潟と塩の結晶の並ぶ水涯線まで、モデルのように並んだ地形景観を楽しんだ。

七月十三日朝、八時(北京時間)の観測で気温プラス一度、西北西の風一メートル、雲量一〇、新積雪七、であった。あたり一面銀世界。ここは標高四三五〇の地である。雪の峠ごえで南西に向かい、昼には雪の無い革吉に着き一泊。翌日、獅泉河入りをした。



ムクチナートからの眺め/山本明三郎

ここから先のインダス川の大地溝帯を通ってのカンリンポチエ山麓の大金入りやカンリンポチエ(カイラス山)一周の旅、ナムナニ東面の偵察、普蘭(タクラコット)町や南のカジャ寺見学等は、ナムナニ隊やTV報道で紹介されたものだ。カンリンポチエの五体

投地札による巡回は感動的なものだが、そのために遠路を一年半も歩いてくる人達の心情はもともとすばらしいと思った。「天と地に生きとし生けるものに幸せを、我が来世、家族の来世に幸せを」と祈るために彼等は次から次へと歩いてくるのである。カンリンポチエは小型氷河の展示場である。いろいろなタイプの氷河やその作った地形を短時間のうちに観察することができる。河口慈海も見た竹馬拉(ドルマラ)の湖はサーモ・カルストであった。

海外の山

ニエンチンタングラ峰の概況

葛西 森 夫
(東北大学山の会)

ニエンチンタングラ峰(七一六二)は、アジアの内奥部で世界最高最大の高原である青蔵高原と印度洋側の分水嶺をなすニエンチンタングラ山脈の主峰で、青蔵高原の盟主である。この山脈は青蔵高原の南部を画し、全長六〇〇キロメートル以上に及び、ヤルツァンポ(プロラプトラ)川沿いに入り込むモンソンの影響をうけてチベット最大の氷河地帯を形成し、次第に乾燥して西部へと連なる。

ニエンチンタングラ峰は、この山脈の西部に位置し、氷河に覆われた六〇〇〇以上の主脈から東に派生した支脈上にあり、七〇〇〇以上の四峰からなる。ほぼ東西に屏風状に連っており、南北両面ともに二〇〇〇以上の高差で聳えている。

青蔵公路沿いにある山にかかわらず、わずかにランドサット衛星から撮影した空中写真と、チベット最大の湖ナムツォを越してその北岸から撮った、頂上が雲にかくれた遠望写真があるだけで、情報がいさばり手に入らなかった。そのうちにナムナニ峰登山隊員が

撮影した写真が数枚手に入り、上部の模様が判明した。しかし、山容の大部分は前山に隠されている。中央に見える大きな白いピークが主峰と思っていた。偵察隊を派遣する時の状態はこのようなものであった。

昭和六十年九月下旬より十月にかけて偵察隊を派遣したが、そのもたらした情報は大きかった。まず、主峰がわれわれが考えていたピークよりはるかに西に片寄ったものであり、主峰から七〇〇〇以上の稜線が第三峰(七一六一)、われわれが主峰と考えていた第四峰(七一七三)に連り、さらに東に第四峰(七〇四六)へと続いている。この稜線の北側は二〇〇〇以上の切れ落ちており、南側でも登れそうなルートは主峰の西稜と第二峰の南稜だけなのである。主峰の七〇〇〇以上の付近が岩壁となっており、これをどう越えるかが登頂の鍵となるだろう。

登攀期間は昭和六十一年三月から五月にかけてのプレモンスーンを予定している。なお、ニエンチンタングラ峰登山と同時に、青蔵省西寧からラサを経てネパールのカトマンズまで、途中の旧跡や仏教調査を行なう人文調査隊と、成都よりラサに到る植物調査隊の派遣を予定し、東北大学日中友好西蔵学術登山計画としている。

た。

瑪旁雍錯(マナサロワール)で

は黒頸鶴(和名オグロヅル)の観察にでかけ、五〇〇メートルの匍匐前進でカンリンポチエを背にし、た鶴の写真をとることができた。

出席者 徳久球雄、中村純二、田

村協子、石井恵美子、山崎健、鈴木淳平、大森弘一郎、山口一孝、松久秀夫、広羽清、柳沢須佐男、桐生律枝、神谷光昭、梅野淑子、渡辺良一、高遠宏、武居台三、沢井政信、齊藤かつら、高橋詢。

(高橋 詢)

お知らせ

第14回 山岳史懇談会

テーマ マナスル登頂
日時 3月13日(木) 18時30分より
分よりルームにて開催

図書委員会



三水会例会山行

国師岳から

金峰山へ

大弛といえ、かつては金峰山へ、あるいは国師岳への縦走路の重要位置を占め、また直接琴川ぞいのトロ道を利用するにしても、悠に一日を費すという、奥秩父でも最も深いところであったものだが、山梨県の牧丘町と長野県の川上村を結ぶ、峰越林道が通じて以来、その様相を一変させてしまった。

シーズンともなればマイカー族が押し寄せ、国師岳はハイヒールでも、いともたやすく登れる山となってしまった。

今回の国師岳から金峰山の計画は、労力プラス時間と金銭を秤にかけて、多少うしろめいた気がしないでもなかったが、われわれ三水会一行、二十八名のグループは塩山駅前のタクシーの列に加わった。

車が焼山峠から六本橋にさしかると、一つの口実でもある車窓

展望は大きく開け、新雪に輝く富士山や南アルプスがまばゆいばかりで、思わず快哉を叫んだものだった。

金峰山にはまだ降雪はないようだが、五丈岩がだんだんと、大きく近づいてくる。

この峰越林道が以前の琴川林道と呼ばれたトロ道につけられたのか定かではないが、車窓展望に限って言えば、二十数年前のそれであった。

大弛には案内板があつて、わざわざ大弛峠と記してある。大弛の弛(だるみ)は、たるんだところという意味で、峠である。峠の峠と案内されるところに、もはや登山の領域から離れてしまった悲しい運命が感ぜられる。

国師岳には約一時間のアルパイトだが、途中二、三の遭難碑がある。何れも季節はずれの降雪による犠牲者のものだが、こんなところにも、かつてのこの山の深さが窺えよう。

国師岳の頂上からは長野側に心細い道が下っている。岩屋林道と呼ばれたものだが、今では辿る人もまれではないのか。

見渡すと三宝、甲武信、木賊から破風に続く奥秩父の主脈がとりわけ立派である。近くのひととき

高い山は二千六百m、奥秩父最高の北奥千丈岳だ。このピークにも足跡を印そう。

大弛から樹林帯の緩い登りで朝

日峠、さらにひと登りで朝日岳。国師岳に優るとも劣らない展望を持つている。金峰山には鞍部から最後の登りが待っていた。

この山頂からは釣瓶落しの黄昏と、佐久から吹き上げる冷い風に追われる如く、今宵の宿、金峰山小屋に急ぐ。

赤々と燃える薪ストーブと、熱いお茶が、冷え切った身体には何よりのご馳走だった。

夕食後、戸外に出てみると、寒暖計はマイナスを指していた。見上げた空は満天の星。

翌早朝、最短コースの長野側に下山する。柵の林立するその道に古き奥秩父を偲び、石楠花の群落にはその開花期の美しさに想いを馳せながら、樹種が落葉松に変わると西股沢出合は近い。

ここから坦々として続いていた林道も、数年前の台風で部分的に荒々しく崩壊している。

金峰山荘まで下ると、予約した村営バスが待っていた。

信濃川上まで運ばれる途中、車窓から金峰山に最後のアデューを送り、今回もめでたく恒例奥秩父シリーズの幕引きとなった。昭和六十年十一月十六、七日のことである。

参加者 坂倉登喜子、斉藤健治、久保孝一郎、広羽清、松井美恵子、平柳一郎、荒野康子、滑志田隆、高田真哉他十九名。

(高田真哉)

第九回

丹水会例会

(十一・十六・十七)

前回好評だった丹沢精通者の話を聞く会の二回目として、秦野山岳会の宇山幸治氏をお招きして、武田久吉氏も泊られたという秦野の大川楼で第九回丹水会例会が開かれた。

宇山氏は、戦前の地図や資料も持参され、関東大震災以前の尊仏岩の写真や、会の資金にするために発行したという山岳絵ハガキなど、当時を知る上で興味深いもので、



水無本谷/鈴木正俊

があった。また、大震災によって丹沢の標高が数十センチ沈下したことや、震災前は現在のようなガレや崩壊地がほとんどなかったことなど、一色刷の地図を片手に熱弁された。

食事後の懇親会でも話題は尽き

ず、酒を買い足して十二時すぎまでの二次会も、二十名余りが話題に花を咲かせた。

翌日は葛葉川の山荘跡まで車で入り、尾根コース組と別れて二十名ほどの大部隊で遊行開始。持参のザイルも一度も出さず、二俣で昼食。古谷氏のコーヒ―店は恒例となったが、中にはスキヤキまで始める者もいて、皆を羨ましがらせる。

前線の通過のためか、強風の吹き荒れる三ノ塔へ全員元気に辿り着き、小屋陰で休息後二ノ塔尾根を下る。シカ止めの柵を二度乗り越えて着いた山荘跡には、再びコーヒ―店が店開きしたのは言うまでもない。

参加者 近藤信行、鳥居亮、大森薫雄、古谷聖司、峰谷緑、三栖寿生、小林碧、鈴木正俊、石川治郎、宇山幸治、千葉保之、藤江幾太郎、川上光久、加藤比呂志、山崎健、中村純二、中村あや、松田雄一、山本正基、三好まきこ、堀井昌子、石井貞雄、松尾良文、大森久雄、三宅次郎、小川雅庸、網倉卓爾、森武昭、今井洋地、細井澄子、山内純夫、稲葉十四男、滝沢芳章。

△お知らせ▽

次回丹水会例会は十回目となりますので、会場は登山訓練所を予定しています。くわしいことは滝沢までご連絡下さい。

(滝沢芳章)

玄さん

御回復おめでとう！

十二回めを迎える玄山会は、藤島玄先生の快気祝を兼ねて、紅葉もちらほらの山々に囲まれた会津の高郷山荘で、十二月二十七日、越後支部の恒例により開かれまして。

玄山会に出席ができるようになるまで、健康を回復された藤島先生の、今までの経過を略記させていただきます。

五月三日、自宅で転倒し、後頭部を強打して歩行困難、言語障害をきたし入院。もともと気丈な藤島先生のこと、精密検査の結果を待たずして退院、五月二十一日、家族のすすめで再入院したが、病院内で再度転倒して腰を打ち、以前にも増して病状悪化。しばらくは医師のすすめで面会謝絶の状態が続いたが、徐々に快方に向い、六月二十三日退院して自宅療養となる。七月上旬ごろより言語もやや正常となり、食欲も出て七月下旬には屋外での散歩も可能となる。九月上旬には今年度の第十二回玄山会を高郷山荘で開催すること、先生ご自身も出席されることに決定。

かくして、一年ぶりの「玄さん登場」となったわけです。

以前のような毒舌を聞くことは

できませんでしたが、参加の会員に軽く冗談をいって周囲を笑わせるほどに健康を回復された藤島先生にお目にかかれたことはひじょうに嬉しいことでした。

多少手助けはいるものの、ゆつくりと足を運ばれるお姿は、以前、飯豊連峰にお供をさせていただったころを偲ばせるものがあった、胸が熱くなる思いでした。

来年度の第十三回玄山会は、藤島先生ゆかりの地杖差の麓、大石で開催が予定されているとのことですが、それまで、「元気な玄さん」でいてほしいと思いますし、十四回、十五回と、いつまでも玄さんにお会いできる玄山会であってほしいと思います。

また快気祝いの祝い酒や、支部会員が十時間ばかりで阿賀川で釣り上げたというイワナ、ヤマメ、ハヤ（なんと合わせて三百九十匹）の炉端焼き、手打ちの新そばなど、越後支部ならではのことで、心ゆくまで賞味させていただきました。ほんとうにありがとうございました。

出席者 藤島先生ご夫妻、滝口純、滝口豊子、山崎幸和、早川英夫、佐藤一栄、山岸栄三郎、高橋庄一、鈴木敏雄、平田大六、渡辺竜吉、小早川又一、佐久間惇一、赤沢清明、平田静一郎、北村猛、斉藤喜一、青木督平、斉藤平七、井口正男、斉藤弘、麻賀進、荒木吉栄、田村祥司、久保勝司、新保口

図書紹介



ネパールの歴史

—対インド関係を中心に—

西沢憲一郎著

この度、前駐ネパール大使西沢憲一郎氏が、第三世界研究シリーズの一環として、標題の書を上梓された。

本書はネパールの歴史を古代より説き起こし、東インド会社の出現による、英領インドとの共存から、第一次、第二次世界大戦を通じての英印との戦時協力までを第一部、第二次大戦後、インドが独立してからのネパールとインドとの関係を第二部として、第二部第五章の現状および結語、で結ばれている。

川喜田二郎氏の言を借りれば、「古代のネパールから説き起した本書は、ネパールの政治・経済・外交、時にはその他の文化に関する内外の文献を、ほとんど読破され、よく消化した上でまとめられており、大変 Comprehensive な素晴らしい本である。本書一冊を読めば、ネ

パールの政治・経済・外交まで、すべてわかる」と絶讃されている。

著者が冒頭に述べられているように、本書は、ネパールとインドとの関係を「センター・ペリヘリ（中心と周辺）の理論」を適用して、歴史的に追究することにより、現状の性質を理解しようと試みており、ネパールの現代史という難かしいテーマを上手にまとめている。題名は歴史ということになっているが、歴史だけでなく、政治もわかるし、これがもたて、ネパールの現代の社会構造も、過去のバックグラウンドを知ることによってわかるよう工夫されている。

更に本書の特徴としてあげられる点は、著者の主観的な判断や意見が随所に入っていることである。これは、大使ご自身が、在任中に、大使としての立場で、多くの人に質問し、確かめられたからこそできたのではないかと想像される。

本会のマナスル登山は、一九五二年〜五六年にかけて行なわれた訳であるが、当時の在カトマンズインド大使館の立場など、何となく判っているようで判らなかつた点、或いは誤解や偏見について、本書を読むことによってはっきりしたり、考えを更めさせられた点も多かった。その意味でも、

大変に参考になった。同時に、ネパールの開国直後の政情不安定な大変な時期に、よく、西堀栄三郎氏が単身入国を果たし、マナスル登山の許可を取ってこられたものと、今更ながらその努力に敬意を表した次第である。

ネパールの山に向われる会員各位に一読をおすすめる次第である。

一九八五年六月二十五日、勁草書房発行、四・六版、三七九ページ、三八〇〇円

(松田雄一)

山旅の足音

渡辺兵力著

学者であり、且つ有能な岳人でもあった父君、渡辺八郎氏の愛情を感じながら、著者は幼い時から山に親しみ、山を楽しむ、時には谷川岳の岩壁に初登攀記録を打ち立てながら、父君と同じ学者としての道を歩んできた。そして古稀を迎えた今、数十年前の初登攀も、当事者にとつての思い出でしかないことを悟らせるような『ある岩棚に』など、これまで「アルプ」など幾つかの雑誌に発表してきたものを、時には発表年代を前後させながら、読み易いよう一冊に纏め上げたのがこの「山旅の足音」である。

衛、吉田正巳、本間一人、酒井定勝、伊藤尊仁、桑原勇蔵、小野木伸夫、佐藤光義、酒井清明、唐橋宏、矢田目昇、牧野牧夫、五十嵐恵美子、高畑良子、江花久光、江花三起子、佐竹信幸、清野正二、柳沢一男、宅間清子

(宅間清子)

ゲッチンゲンの

オデルさん

小野 有五

十月八日から四日間、西独のゲツチンゲンで開かれた「ヒマラヤの水河作用」についてのシンポジウムに出席したとき、参加者名簿にオデルという名前があることは気付いていたが、まさかあのオデルさんとは思えず、会場でそれが白髪長身のオデルさんその人と知って驚いた。初めてお話しする機会を得て、早速五年前に日本山岳会の招きで来日されたときお会いできなかったことをお話しすると、たちまち日本のことを細かに思い出され、日本でのご体験のあれこれを楽しそうに話して下さいました。北アルプスで雨にたたれたのはいかにも残念で、それに日高に行けなかったことが心残りだと言われたのは、さすがにアルピニストと感服した。

次の日はオデルさんのご講演がある日で、一九二四年の第三次遠征の様を当時の珍しいスライド

を使って、四十五分の講演時間を大幅に超過し、お話しになった。とにかくダージリンから始まり延々とキャラバンの話が続くので、ロンブクに着いた頃にはもうとうくに講演時間を過ぎてしまい、司会者からの合図もあって、肝心のアタックの時のお話はしられませんでした。ご講演のあと、休憩時間にお目にかかる、今日はあなのためにこのネクタイをして話しましたと言われ、はっとして見るとオデルさんの胸には濃紺に黄色い紋章をちらしたJACのネクタイがきちっとしめられていた。

最後の日はホテルまでオデルさんをお送りして、しばらくお話しする時間をもつことができた。マロリーのこと、夏の別荘でヴィクトリア女王が亡くなり、その葬列が別荘から出てくるのを幼いころ母堂に連れられて見に行かれたこと、そのとき近衛の軍楽隊が演奏し始めたショパンの葬送曲をきいて電撃のような感動を受け、それ以来音楽好きになられたこと、ヨーロッパ・アルプスの思い出、書斎人であられた父君の逸話など話はずきなかつたが、あまりお疲れになつてもと思い一時間あまりでホテルを辞去した。日本山岳会の皆様にくれぐれもよろしくとの伝言を託されたので、ここに一文を草してお元氣なオデルさんの近況をお伝えした次第です。

図書紹介

良き時代の山を経験した著者は、恵まれた岳人の一人だと思ふのだが、登山は山を下って始めて成功といえる、の言葉を借りれば、著者が下り坂の道を歩み終えるまで見届けたい思いを抱く。

一九八五年十月刊、茗溪堂発行、二〇一ページ、定価一四〇〇円 (岡沢祐吉)

海外登山の報告から

『ヒムルン・ヒマールへの道』—マナン街道旅日記—(吉野慎造著、一九八五年刊、非売品) 一九八三年二月から約六十日間、仙台市役所山岳会がマナスル山群北端に位置する、ヒムルン・ヒマール(七二二六〇)に遠征した時の隊長であった著者が、副題のようにベイス・キャンプまでのマナン街道を歩いた紀行。ヒマラヤの住民の姿がいきいきと描かれている。

『天山博格達達VI峰登山報告書』(仙台一高山の会天山登山実行委員会編、一九八五年刊、非売品) 一九八四年夏、天山山脈ボグダ峰(五二八〇)初登頂の報告。

『シムシャルからバミールへ』—カラコルムの未知の峠—(酒田ヒマラヤ研究会編、一九八四年刊、非売品) 一九八二年七月

末から一カ月、粕谷俊矩氏他三名で西部カラコルムを歩いた記録。インダス川の支流シムシャル川の源流の村からビルジエラブ水河を登りシムシャル村の夏村を訪れている。(大橋晋)

遭難・追悼集から

昨年一月、マッキンリーで消息を絶った植村直己の搜索報告・追悼集が『極北に消ゆ』(明治大学山岳部炉辺会編、山と溪谷社、一二〇〇円)として刊行された。第一次搜索報告(橋本清、第二次搜索報告(広江研、米国側搜索報告(ロバート・ゲルハルト)をはじめ、それにかかわった隊員や炉辺会員たちの、友をおもひ切々たる行動記録が克明に記されている。膨大なエネルギーと経費をついで、多くの植村ファンの声援を得たにもかかわらず、ついに彼をみつげ出すことはできなかった。大塚博美は「植村は遥かなるマッキンリーの千古の水雪の中に静かに眠っており、(山頂の)小さな日の丸一枚が帰って来た」と書いています。追悼の部には、交野武一、中島信一ら二十四氏が執筆。

『風狂を尽して』は、植村直己を隊長とする冬期エベレスト登山隊に参加して、第三キャンプから第二キャンプに下る途中、遭難死し

た竹中昇の遺稿追悼集である。全六章五四二頁の大冊のなかに、小学校時代からの日記・ノート・詩、早大山岳部時代の登山記録、随想、書簡、さらに卒業論文やレポートが、おさめられ、そして各章に肉親や友人の追想が組みこまれている。編年体をとりながら、竹中の山に賭けた短い生涯を集約した、みごとな編集(永田秀樹・今野善郎)である。追悼には浜野吉生ら三十五氏が執筆。(創作社刊、非売品、ただしルムにて希望者に頒布)

『そしてケルンは残った』は昭和五十七年夏、カラコルム・パスキー峰遠征で肺水腫により不慮の死をとげた市川寛一(諏訪山岳)の追悼集である。成田俊夫隊長の遠征総括、谷内法秀医師の医療報告のほか、市川の記録・書簡、仲間たちの追悼をおさめる。(連絡先・諏訪市諏訪一ノ二二〇七、新雪荘内、一九八二年カラコルム登山隊実行委員会)

『天の匂い』(登攀クラブ著水・早大岳友会刊)は、昭和五十六年、チゴリ峰に無酸素登頂後、滑落死した柳沢幸弘の遺稿集である。昭和四十六年からの山行リストや記録その他がおさめられ、坂下直枝、尾崎隆ら十八氏の追悼がある。(近藤信行)

晩秋のアルタイ行と 中国登山界余閑

早乙女綾次

十一月初旬のアルタイはハバロフスクにも匹敵する緯度だから、あたりの窪地には斑雪が見え隠れし、アルタイ山脈からの清流はすでに氷結していた。

日中スキー交流の当初から、仕掛人として係った関係で、松花江、亜布力、通化等々、中国の主要スキー場行脚を続けたが、厳冬の白頭山登頂と、長白山麓の大海林訪問の機会は所用で失い、残念に思っていたら今年はアルタイと聞いて、三年振りに喜び勇んで出掛けて行った。

ところが私のアルタイは、二四〇〇メートルのスキー場開発計画の無名ピークであった。

しかし、交流の当初から私のわがままを常に満たして、仲間の厳冬の白頭山登頂も、今回のアルタイ訪問も実現させてくれた、張本人の老朋友王紹裘さんが、アルタイスキー場開発顧問として当地に赴任して再会出来たことは嬉しかった。

山やのはずの私が、交流目的の違ひから、今回はスキー場行脚に終わったのは誠に残念だったが、不思議なのは、里での歓迎レセプションには、北京では中国登山協会主席史占春氏、ウルムチでは同協

会副主席で新疆ウイグル自治区分会主席趙凌雲氏他、中国登山界の多士済々の面々にお招きを受けたことだ。

それに、十日間に渡る長途旅行の付添員までが、今回は登山協会委員で一層驚きの感を深めた。

(この分だと、次回の招待先は、内蒙古のクロスカントリー場あたりだろうか)

私の中国の山への入口は青海省から。入山の手段は、と問われれば高所医学交流の中にでも潜り込みますよ、と申し上げ帰国した。入山料を取られぬ手段と方法を次から次々と講じながら、未開放地区に深く潜入する私に、先方は手を焼いていたのかも知れない。

インド・ヒマラヤ ピンダリ氷河への道

坂倉登喜子

ランタン谷のエーデルワイスを訪ねて以来、早くも十年の歳月が流れ、今度はどここの花を探訪しようか、...と思っていたところ、昔立教遠征隊の隊長として、ナンダコットへ行かれた堀田彌一氏等の下山ルートのピンダリ氷河付近に、花のあったことを思い出した。

そして堀田氏に聞いて見ると、最近小島という人が行っているから連絡して見てはと紹介頂いた。私たちの計画は同氏からの近況

穂高画想

山口一孝

私が光彩展に始めて出品したのは一九五七年にクレパスで画いた「晩秋の穂高」だったと思う。この年の夏肺結核の手術を済ませて退院したが、恢復期に同室の小出画伯の指導で絵を画き始めたのが今日まで続いている。

同年十一月に岳友木村君と共に二十五年振りに上高地を訪れ西穂に登ったとき独標の大岩に座って画いたのがこの画である。

その晩西穂の小屋のラジオで、ソ連が世界で初めて人工衛星「スプートニク」の打ち上げに成功したニュースを聞いたのも思い出である。翌日は奥穂から涸沢に下りる予定で出発したが、西穂の頂上で天候が急変し激しい吹雪となったのであきらめ、直下のルンゼを降った。

上高地は土砂降りだったが、後で、その日北穂の稜線で凍死者のあったことを知り良かったなあと思っている。

それからまた二十三年上高地にご無沙汰したが、一九八〇年秋日本山岳会の清野恒画伯指導のスケッチ教室に参加し、紅葉の岳沢や霞沢岳六百山を画いた絵も光彩展に出品している。その翌年の秋には四十九年振りに一人とほとほと

島々谷を降ったが、一九八三年の夏は日本山岳会の高橋照氏に誘われてヴェテラン連と数日を山研で過ごした。照さんの本格的ペンガル料理で満腹し、酒を飲み交しながら貴重なネパールの話を聞き、古き良き時代の山やスキーや映画や不良少年やモダンガールなどの思い出をひねもす語り合った。

その節、山研前の梓川畔に座って、晴れ上った奥穂と西穂を心ゆくまで眺めつつ水彩で「上高地」を画いた。夏雲のように流れてゆく追想の数々...

ジャンの稜線で、岳沢側の密雲上に投影された一行のシルエットの中で自分の頭にだけ御光がさしていたこと。コブ尾根の厳しいトラバース、そして懸垂下降、やっと稜線に出たら日が暮れてしまったが、ヨチに付合って二人で上高地に降った。暗闇の尾根でルートを探するとき手を触れた大岩が揺いだいやな感じ、天狗のコールからアンザイレンで降る時には月が出て、二人の影が雪渓に宿っていた...

一つの稜線、一つのルンゼを画くにも誠に想い出は尽きなかった。

一九五七年の秋、西穂で画いた前穂、そして一九八三年の夏、思い出と共に画いた奥穂と西穂は少しも変らず美しい。大正十五年(一九二六)以来私の心に宿り続けている穂高も常に美しい。

資料を得て急に決定し、一年の準備期間ののち、ピンダリ氷河探訪が実現し、去る九月十四日から十五日間、天候にも恵まれ、十名のベストメンバーでピンダリ氷河付近のエーデルワイス探訪の目的を

果たし、ナンダコットの姿にも接し、無事帰国することができた。

インド・ヒマラヤの様子については、出発前に写真やスライドその他詳細な略図まで提供頂いて、大体的概念をつかんで出発できた

ので全く幸であった。

インドの山は日本で想像していたイメージとは違ひ、緑深い原生林の中に石畳の道が続く、水量の多い溪流や断崖から落下する滝の連続で、みずみずしい緑に被われ

た苔の多い林や、石楠花の密林など、秩父の山を歩いているような錯覚をおこすほどであった。

山道に咲く花もツリフネソウやフロソウなど日本の花によく似た花が多く、ゼロポイントに近づくころ、最初に四本のエーデルワイスを発見、そろそろ花の咲く場所に来たのかと胸のときめきを感じた。今回ゼロポイントでの二泊のテント生活は、山上の楽園に酔いしれる思いであった。ナンドコットの峰に連なる山山の姿が、濃紺の空にくっきりと白く浮き上がり、月明の夜空に輝きを見せていた。それはこの世のものと思えぬ幻想的な情景であった。私はテントに入るのが惜しく、暫くの間恍惚とその姿に見入った。

こんな素晴らしい夜景が写真に撮れたら……と思ったが、私たちのカ

報告

熊本支部秋季例会

熊本県南部、肥後の小京都で知られる人吉市から東へ、日本三大急流の一つ球磨川に沿って車で一時間ほど潮ると、球磨川源流域、九州背梁山山地市房山の麓に、秘湯湯山温泉がある。古くから市房参りの基地として発達した温泉で、東には球磨の霊峰市房山が、北には明日登る予定の江代山(一六〇七m)が間近にそびえている。

十一月九日夕刻、湯山温泉の旅

メラではとてもだめだと思った。ゼロポイントのテントを撤収し、元来た道を戻り、再びダグリ峠を越えて高原に出たとき、ポーターたちが笛に合わせて踊り出した。それは旅の終りの喜びの表現で、私達も嬉しかった。

今回クラブにカムバックして、トレッキングに活躍してくれた松田会員が、私のためにお祝いの花束を作ってくれたのも嬉しかったが、良いメンバーに恵まれて、現地の素朴な子供や村人たちにも出合うことができ、昔ながらの道すがらの風物と共に、インドの印象は、心にしみる想い出を残した。最終はデリーの街を歩き人や車の多いのに驚いたが、それに引きかえピンダリ氷河への道には、山の自然と優しい人の心が残っている嬉しかった。(詳細は報告書で)

踏みしめ一時間ほど歩くと、暗い造林地から明るい雑木林となる。

やがて青々とした苔におおわれたセンツキ谷に出る。森閑とした雑木林の中に沢の水音がくすかに響く。小憩の後、疎林の中を沢に沿って登り、やがて沢筋を離れて尾根を急登し、頂上から北に延びている稜線に達する。稜線の反対側は伐採されていて、折からの冷い北西の季節風をまともに受け、あわててヤッケを着込む。稜線をひと登りして十一時半頂上に着く。時折陽光も洩れるが、雲が多くあまり遠望はきかない。寒風を避けて、近くの雑木林の窪地に腰を降ろす。すっかり葉を落とした樹々の間から、秋の斜陽を一杯に受けた市房山が指呼の間に見える。

まだ点々と紅葉の残る山麓とは対照的に、山頂付近は霧水で白く輝き、早くも冬の装いを始めていた。

参加者 奥野正玄、馬場 猛、石井久夫、田上敏行、大木野徳敏、川端浩文、中村恵二、川上洋子、藤木孝一、馬場千代子、樋口格、樋口洋子 (田上敏行)

北海道支部忘年会

北海道支部忘年会は、十二月七日(土)午後六時より、北海道庁前通りイन्द料理レストラン「タージ・マハール」で開催、橋本支

部長始め二十四名出席、盛大に行なわれた。

先ず、橋本支部長の音頭で乾杯。カバブ、タンドリ、マサラ、ナンのインド料理で、ヒマラヤ山麓に想いを馳せながら、ビール、ウィスキーの飲み放題である。

この夏、支部開催の創立八十周年記念山行暑寒別岳、山岳シンポジウム、記念晩餐会等話題彷彿。高沢会員も十一月末より札幌に戻り、忘年会を一層盛り上げる。

二次会は例により「鶴」、そして、Y会員宅にて朝食をご馳走になる四匹の侍。ホワイトイルミネーションに輝くサッポロの夜は、日本山岳会の夜の感であった。

出席者・順不同 新妻徹、亀井秀子、橋本誠二、柳田涼子、阿部淳、三浦勝幸、小林年、高沢光雄、佐々木喜一、浅利欣吉、井後幸太郎、伊藤紀克、野田四郎、加藤盛一、赤石喜恵子、川越皓充、河村哲子、久保田優一、金井五郎、今村朋信、及川敬一、平野明、沼崎勝洋、佐々木孝雄 (平野明)

会務報告

十二月理事会

12月11日 午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副会長、鳴原、橋本、大橋、梅野、高遠、鈴木、新井、大森、岡沢、

絹川、村木、関塚各理事、中村評議員

委任 松永、浜口、太田、平井各理事、金坂、竹田各監事

審議事項 なし

報告事項

●80周年記念事業委員会最終報告

委員会の報告会を十二月六日開催、各担当より報告。事業委員会、実行委員会を解散する。

十二月六日現在の募金収支につき報告、募金の礼状を発送する。

●OA化委員会報告

会員業務にコンピュータ導入、機械はリース扱いとする。

●評議員会開催について

十二月十九日開催、議題一、会費改訂問題。二、特別基金の件。その他

●各委員会報告

青年懇談会、書評、図書、会報、集会、海外、学生指導、山岳編集、医療、科学研究、総務、山研、自然保護各委員会より活動報告、行事予定等について説明あり。会報を増頁することは、作業の時間が相当かかるので困難である。また、多くの原稿を載せるため、できるだけ原稿は短かくしてもらい、当分増頁しないでやっていく。

海外委はポーランド山岳会との交流登山について検討中。

「山岳」一九八五年は会員名簿と同時に発送する。

図 書 受 入 報 告

図書委員会

昭和 60 年 4 月分受入図書 (つづき)

16. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第二巻 大日本地誌大系 2」 雄山閣 1957 (購入)
17. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第三巻 大日本地誌大系 3」 雄山閣 1957 (購入)
18. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第四巻 大日本地誌大系 4」 雄山閣 1957 (購入)
19. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第五巻 大日本地誌大系 5」 雄山閣 1957 (購入)
20. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第六巻 大日本地誌大系 6」 雄山閣 1957 (購入)
21. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第七巻 大日本地誌大系 7」 雄山閣 1957 (購入)
22. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第八巻 大日本地誌大系 8」 雄山閣 1957 (購入)
23. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第九巻 大日本地誌大系 9」 雄山閣 1957 (購入)
24. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第十巻 大日本地誌大系 10」 雄山閣 1957 (購入)
25. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第十一巻 大日本地誌大系 11」 雄山閣 1957 (購入)
26. 蘆田伊人編 「新編武蔵風土記稿 第十二巻 大日本地誌大系 12」 雄山閣 1958 (購入)
27. 松平伊予守定能編 「甲斐国志 第一巻 大日本地誌大系 44」 雄山閣 1982 (購入)
28. 松平伊予守定能編 「甲斐国志 第二巻 大日本地誌大系 45」 雄山閣 1982 (購入)
29. 松平伊予守定能編 「甲斐国志 第三巻 大日本地誌大系 46」 雄山閣 1982 (購入)
30. 松平伊予守定能編 「甲斐国志 第四巻 大日本地誌大系 47」 雄山閣 1982 (購入)
31. 松平伊予守定能編 「甲斐国志 第五巻 大日本地誌大系 48」 雄山閣 1982 (購入)
32. 七戸山岳会編 「登高記」 七戸山岳会 1985 (版元寄贈)
33. 新谷榮三郎著 「八幡岳登拝録」 1985 (新谷榮三郎氏寄贈)
34. 住友化学東和会山岳部 「霧藻第 26 号」 住友化学東和会山岳部 1985 (版元寄贈)
35. 白石勝彦著 「大ヤマメの世界、溪流の釣り」 山と溪谷社 1985 (版元寄贈)
36. 西村豊著 「本土狐」 信農教育会出版部 1985 (版元寄贈)
37. 日本工業大学ネパール王国古王宮調査団編 「ネパールの王宮と仏教僧院、ネパール王国古王宮調査報告書 続」 日本工業大学 1985 (版元寄贈)
38. "Counterpoints: Sights and Scenes of Switzerland" Swiss National Tourist Office 1979 (版元寄贈)

山岳関係図書案内

小島烏水全集

全14巻／別巻1

編集委員 島田巽・串田孫一・山崎安治・近藤信行

第13回 配本 ⑭ 江戸末期の浮世絵は「近刊」

- ① 初期文集 ② 「文庫」時代(一) ③ 「文庫」時代(二)
- ④ 山水無盡蔵 不二山ほか ⑤ 日本山水論 山水美術ほか
- ⑥ 雲表 日本アルプス(第一巻) ⑦ 日本アルプス(第二巻・第三巻) ⑧ 日本アルプス(第四巻)ほか
- ⑨ 氷河と万年雪の山ほか ⑩ 書斎の岳人 アルピニストの手記ほか
- ⑪ 偃松の匂ひほか ⑫ 山の風流使者ほか
- ⑬ 浮世絵と風景画ほか 別巻 小島烏水研究

定価6,800円／9,800円

図説百科

山岳の世界

N・ディーレンファース、T・ヒーペラー他著
日本語版監修 西堀栄三郎・宮下啓三
B4変型判・上製函入・310頁
定価118,000円

遙かなりエヴェレスト

マロリー追想

島田 巽著
四六判・本文10ボ組フランス装・292頁 定価1,500円

野の鳥の生態 全5巻

仁部富之助著

藪内正幸挿絵 定価各1,400円

素描集 野の鳥たち「ある画家のフイー」

画 川CF・タニクリフ 日本語版監修 高野伸二 定価6,800円

森と私とフクロウたち

クレア・ローム著 経川久康訳

定価1,300円

大修館書店

●図書目録呈

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)294-2221(大代表)

・ルーム日誌 十二月

- 3日(火) 婦人懇談会
- 6日(金) 80周年分科会会議 (私学会館にて)
- 10日(火) 山研委
- 12日(木) 図書委
- 14日(土) J・A・C忘年会
- 17日(火) 自然保護委
- 19日(木) 評議員会
- 20日(金) 会報編集委
- 21日(土) 青年懇談会

お知らせ

☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

◎岐阜支部15周年 記念登山

- 日時 昭和六十一年四月二十六日 (土)二十七日(日)
- 宿泊 源屋 岐阜県本巣郡根尾村 長島
- 登山 能郷白山(一六一七m)
- 会費 一泊三食(記念品を含む) 九〇〇〇円
- 集合 源屋 十八時ごろまで
- 交通 新岐阜発 根尾村見行(二 四時三十分、一五時四十分)

23日(月) 総務委

今月の来室者343名

会員移動

- 物故 5521 田崎 市松
- 1759 林 幹夫
- 9014 平井忠兵衛(10月)
- 改姓 7670 平島 照代→大原へ
- 8700 下川千恵子→河上へ
- 終身会員へ 4983 織田沢美知子

一七時三十分

二〇分

根尾村見発 能郷行(一二時三五分、一五時四十五分、一七時二〇分)
※岐阜乗合バス(〇五八二一六三一二二一)、根尾村役場(〇五八二一六三一二二一)へおたずね下さい。

●参加希望の方は、三月末日までに現金書留にて、会費を左記あてにお送り下さい。詳しい案内状をお送りいたします。

連絡先 千〇一11 岐阜市柳戸一番一 岐阜大学教育学部 技術職業科 江馬論(〇五八二一三〇一一一) 内 三三八七

◎第9回

山岳スキー技術講習会

日時 三月十四日(金) 十六日(日)

場所 志賀高原周辺
講師 小林政志会員他 五、六名

参加費 会員二万円、非会員二万二千元(宿泊費、食費、保険料、事務通信費など。交通費別)

募集人員 三十名程度

申込締切 二月二十八日(金)

申込先 ルーム事務局

▼申込後には計画書を送付します。指導委員会

●セミナー

トレーニング

一よりよい

日時 山登りをするために 三月十八日(火) 十八時半より

場所 JACルーム

会費 三百円

講師 松永敏郎氏、柳沢昭夫氏

▼申込とお問合せは佐藤(九八二一九一七八)まで 婦人懇談会

昭和六十一年二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四 サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(〇三)四四三三

振替口座 東京三十四八二九番

東京都港区六本木三ノノ三〇 印刷所 株式会社 技報堂